

#### AWS Black Belt Online Seminar

## **Developer Tools**

# **AWS Code Services**

AWS CodeCommit、AWS CodeBuild 編

アマゾン ウェブ サービス ジャパン株式会社 ソリューション アーキテクト 福井 厚 2017.03.22



#### 自己紹介

#### ❖ 名前

❖ 福井厚(ふくい あつし) fatsushi@

#### ❖ 所属

- ❖ アマゾン ウェブ サービス ジャパン株式会社
- ❖ 技術統括本部エンタープライズ ソリューション部
- ❖ ソリューション アーキテクト



❖ エンタープライズ アプリケーション開発コンサルタント

#### **❖ 好きなAWSサービス**

❖ AWS Code シリーズ、AWS IoT、Lambda (C#)





#### 内容についての注意点

- 本資料では2017年3月22日時点のサービス内容および価格についてご説明しています 最新の情報はAWS公式ウェブサイト(<a href="http://aws.amazon.com/">http://aws.amazon.com/</a> )にてご確認ください
- **資料作成には十分注意しておりますが、資料内の価格とAWS公式ウェブサイト記載の価格に相違があった場合、AWS公式ウェブサイトの価格を優先とさせていただきます**
- 価格は税抜表記となっています.日本居住者のお客様が東京リージョンを使用する場合, 別途消費税をご請求させていただきます。

AWS does not offer binding price quotes. AWS pricing is publicly available and is subject to change in accordance with the AWS Customer Agreement available at http://aws.amazon.com/agreement/. Any pricing information included in this document is provided only as an estimate of usage charges for AWS services based on certain information that you have provided. Monthly charges will be based on your actual use of AWS services, and may vary from the estimates provided.



# Agenda

- ❖CI/CDとAWS Code Series
- AWS CodeCommit
- \*AWS CodeBuild
- **☆**まとめ





## ソフトウェアの動きは加速している

- ❖ソフトウェアの作成と配布はかつてないほどスピードが要求されている
  - ほとんどあるいはまったく資金調達せずに

スタートアップが巨大企業に対抗できる

- ダウンロードひとつで数百万人のユーザー にすぐにソフトウェアを配布できる
- 多くの要求に応えるには機敏性が最も重要













## ソフトウェア配布モデルは大きく様変わりしている

#### かつてのソフトウェア配布モデル







#### 新しいソフトウェア配布モデル















# 機敏な動きに必要なツールとは?

❖ この新しいソフトウェア駆動の世界でソフトウェアをリリースするのに必要なツールとは

- ソフトウェア開発のリリースプロセスの流れを管理する ツール
- コードの不具合や潜在的な問題を正しくテスト/検査するツール
- アプリケーションをデプロイするツール



# リリースプロセスの4つの主なフェーズ

#### ソース

#### ビルド

#### テスト

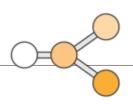
#### 運用

- ソースコードを チェックイン
- バージョン管理、 ブランチ管理
- 新しいコードの ピアレビュー

- Java、C#などの コードのコンパイル
- ユニットテスト
- スタイルチェッカー
- コードメトリック
- コンテナイメージの 作成

- 他のシステムとの統合テスト
- ロードテスト
- UIテスト
- 侵入テスト

本番環境に デプロイ











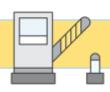
## リリースプロセスのレベル

継続的インテグレーション(CI)、継続的デプロイメント(CD)を実現

ソース ビルド テスト 運用

継続的インテグレーション

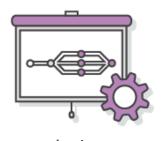
継続的デリバリ



継続的デプロイメント



# 継続的デリバリのメリット



ソフトウェアの リリースプロセスを 自動化



開発者の 生産性を改善

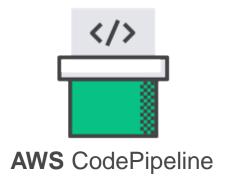


ハクをすはやく 検出して対処



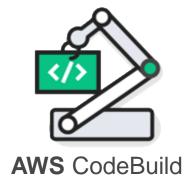
アップデートの 配信を高速化











# 継続的デリバリ == 開発者がより幸せに!

ソフトウェア リリース フェーズ

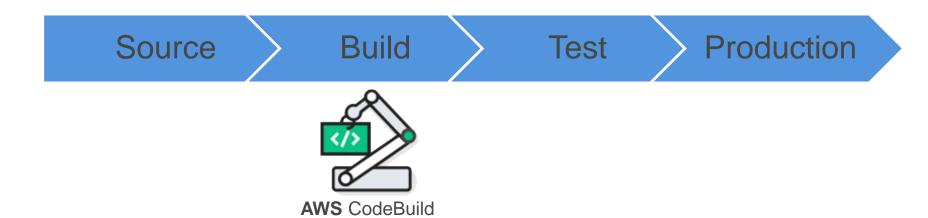
Source > Build > Test > Production



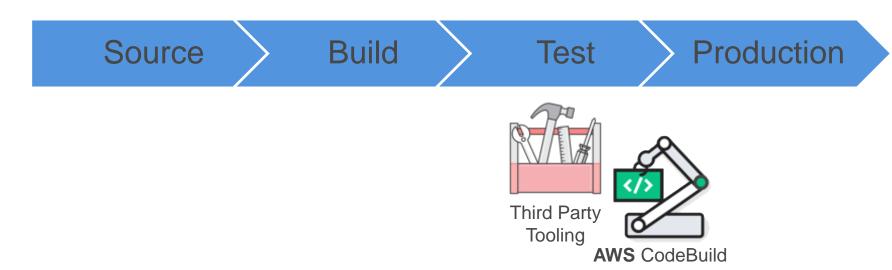














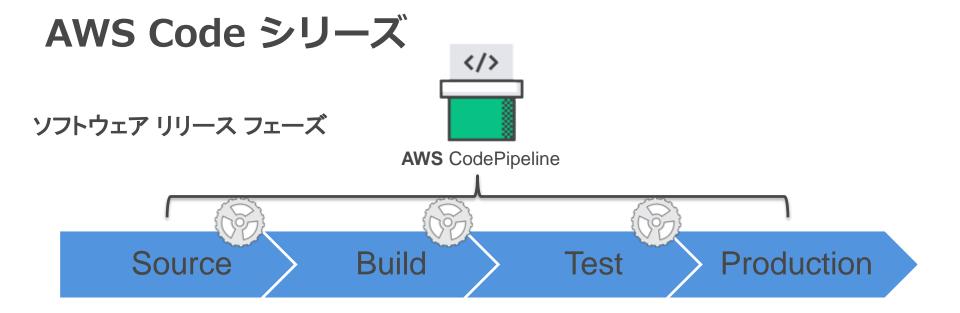
ソフトウェア リリース フェーズ

Source > Build > Test > Production

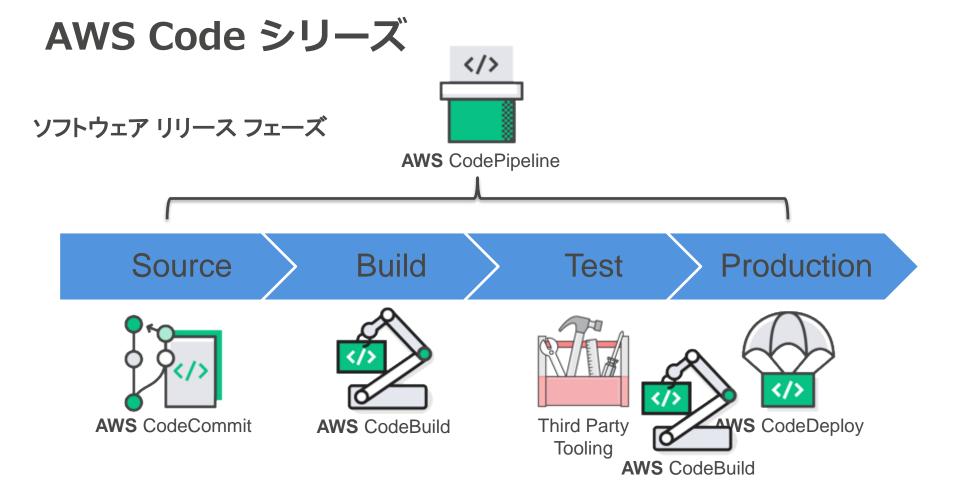














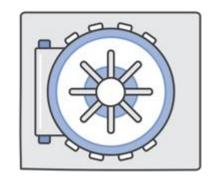


# 自社でホストするバージョン管理ツールの課題

- ❖ 開発者ごとの高価なライセンス料金
- ❖高いハードウェア保守コスト
- ❖高いサポート スタッフのコスト
- ❖保存や管理できるデータ量やファイル タイプの 制限
- ❖管理できるブランチの数やバージョン履歴の数の制限



## クラウドにおけるソース管理に求められるもの



Secure



Fully managed



High availability



Store anything



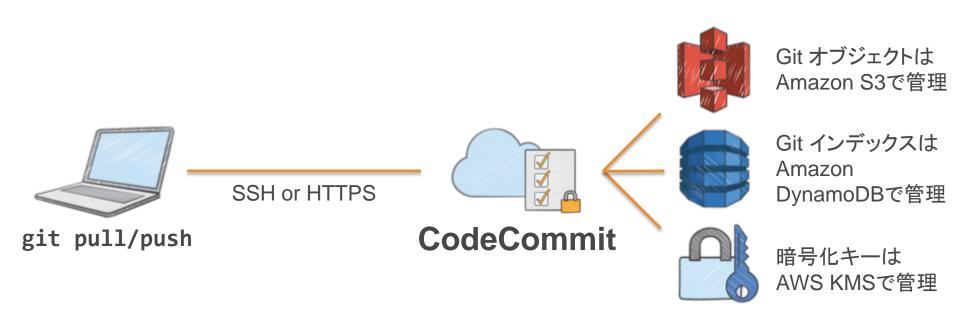
#### **AWS CodeCommit**



- ❖ AWSによるフルマネージドなサービス
  - ❖ 高可用性、耐久性及びハードウェア、ソフトウェアを管理する 負荷の削減
- ◆ セキュアにコードを管理
  - ❖ AWS CodeCommitは送信時及び保存時に暗号化
- ❖ 容易にスケール
  - ❖ 多数のファイルやブランチ、履歴を保持可能
- ❖ どのようなファイルも保存可能
  - ❖ 保存できるファイルのサイズやタイプに制限はない
- ❖ 他のAWSサービスやサードパーティーと連携可能
  - ❖ IAM Roleによる他のサービスとの連携が容易
- ❖ 他のリモードレポジトリからの移行が容易
  - ◆ 他のGitベース リポジトリからシンプルに移行可能
- ❖ 既存のGitツールが利用可能



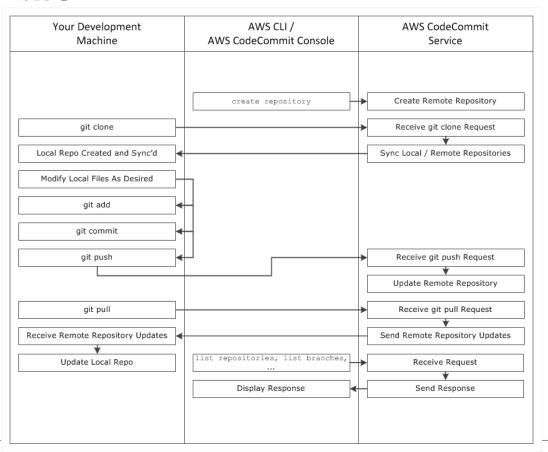
#### **AWS CodeCommit**





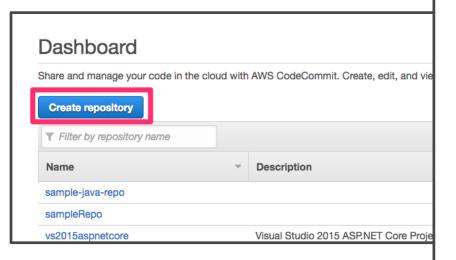
#### CodeCommit 利用の流れ

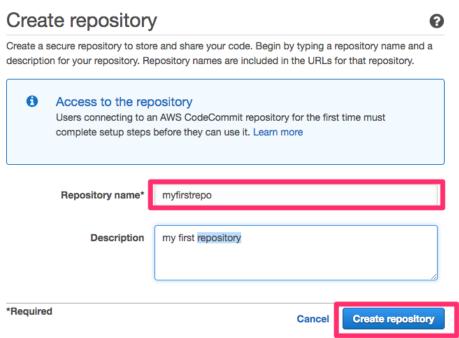
- 1. AWS CLIかAWS CodeCoomit コンソールを利用してAWS CodeCommit リポジトリを作成
- 2. 開発マシンから **git clone** で特定のリポットリの名前を指定。AWS Code Commitリポジトリと接続されたローカル リポジトリを作成
- 開発マシン上のローカル レポジトリを編集し、git add、git commit、git pushすることでAWS CodeCommit リポジトリに変更を送信
- 4. 他のユーザーの変更をダウンロードする ために **git pull** を実行しAWS CodeCommitリポジトリとローカル リ ポジトリを同期。これによってファイル の最新バージョンで作業していることを 確実にする





## リポジトリの作成





#### AWS CLIで実行

\$ aws codecommit create-repository --repository-name MyDemoRepo \
 --repository-description "My demonstration repository"



#### AWS CodeCommit を利用するには

- ❖ 最も簡単な方法: AWS CodeCommitのHTTPS接続で Git 認証情報を設定する
  - ❖ IAMでGitユーザー名とパスワードを生成して使用
  - ❖ AWS CodeCommitでサポートしているすべてのOSで動作
  - ❖ 統合開発環境(IDE)やその他のツールと互換性がある
- ❖ その他の接続方法
  - ❖ SSH接続(IAMとSSHキーの紐付け、Linux, Mac、Unix、Windows設定)
  - ❖ 開発ツールからの接続(Visual Studio, Eclipseなど)
  - ❖ 詳細は以下のURLを参照 <a href="http://docs.aws.amazon.com/codecommit/latest/userguide/setting-up.html">http://docs.aws.amazon.com/codecommit/latest/userguide/setting-up.html</a>



#### HTTPS接続とGit 認証の手順

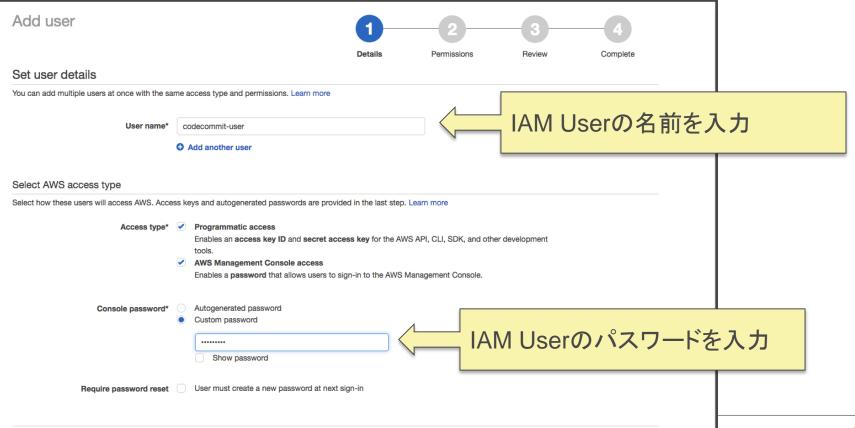
- 1. AWS CodeCommit にアクセスするIAM Userを作成
- 2. IAMに静的なユーザー名とパスワードを生成
- 3. 生成した認証情報を Git のユーザー名、パスワード認証で利用
- ❖ AWS CodeCommit はGit version 1.7.9以上をサポート
- ❖ AWS CodeCommit は Curl 7.33 以上が必要 curl update 7.41.0 をHTTPSで利用する場合は既知の障害があり

#### 以下を参照:

http://docs.aws.amazon.com/codecommit/latest/userguide/troubleshooting.html



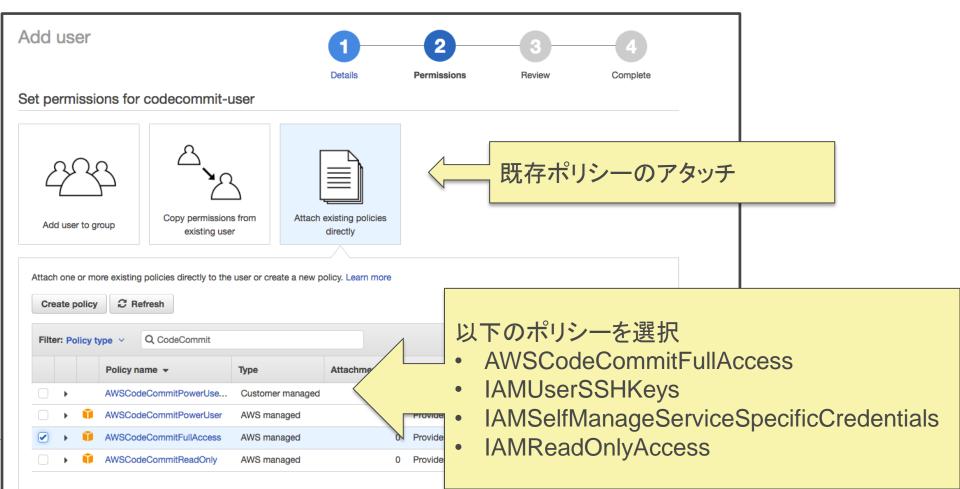
## IAM User の作成



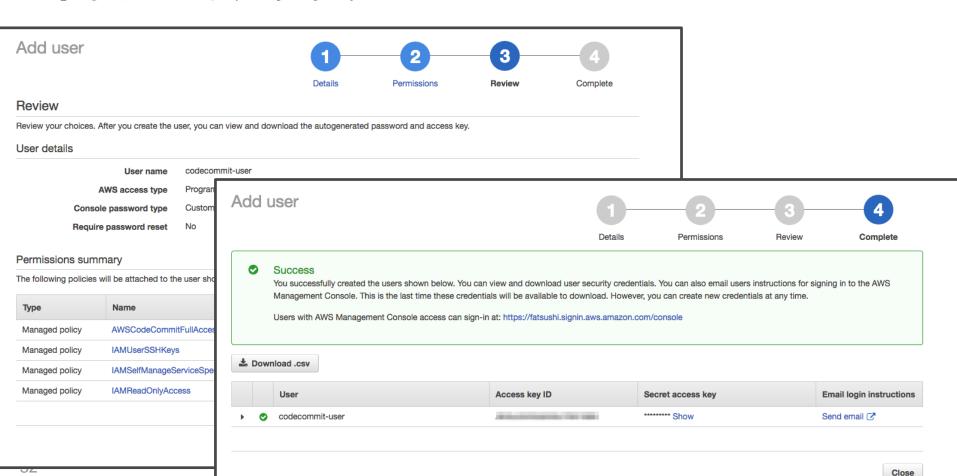


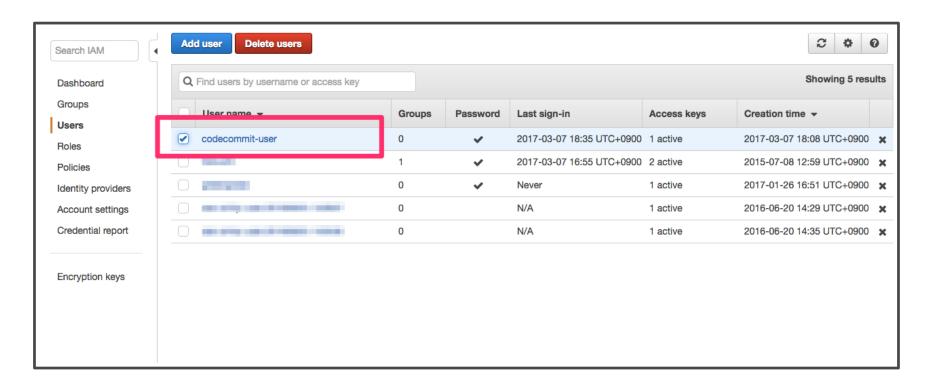
**Next: Permissions** 

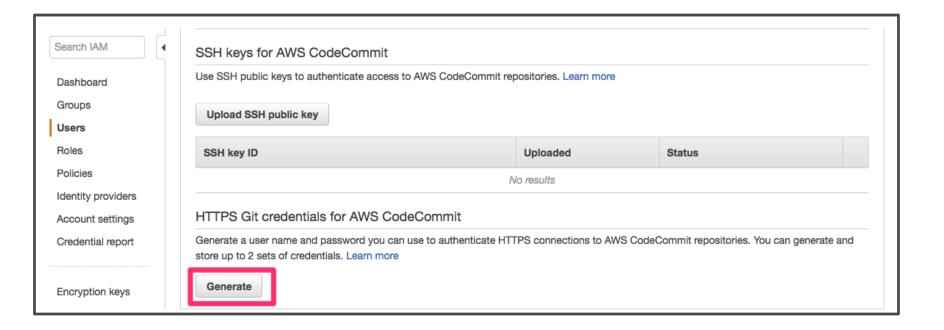
# ポリシーのアタッチ



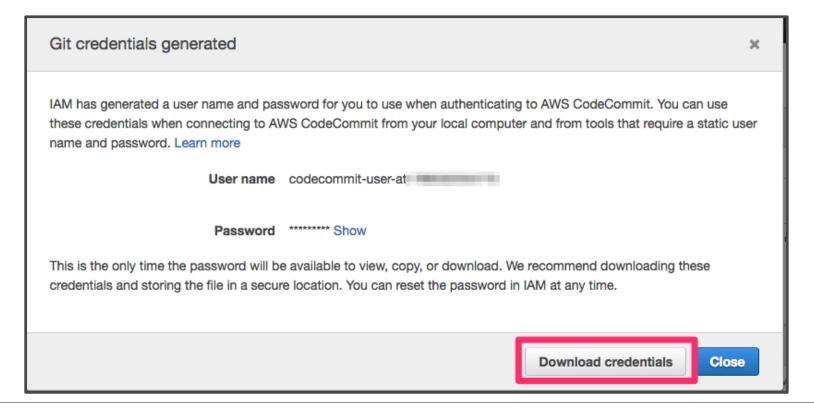
## ポリシーのアタッチ



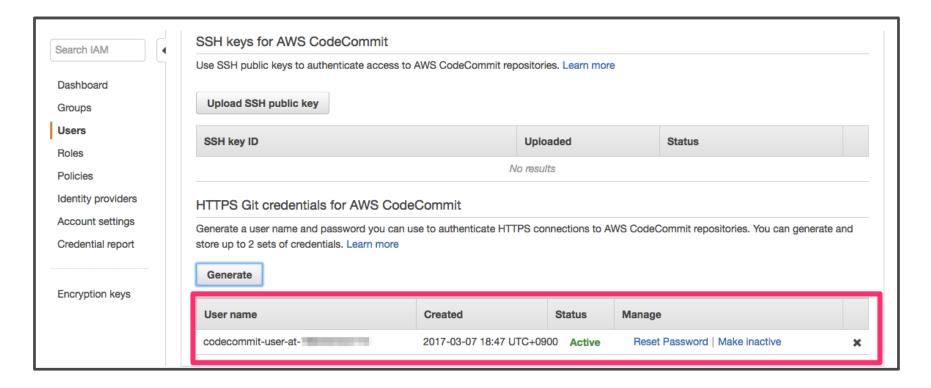














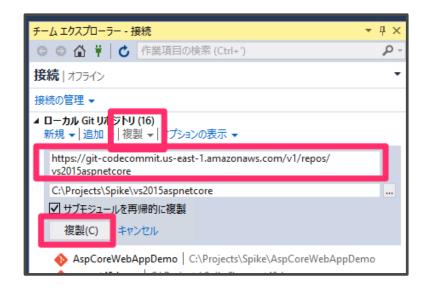
# Local GitからCodeCommit への接続

❖git clone や git push 実行時にIAMコンソール で生成しダウンロードしたユーザー名、パス ワードを指定

❖開発ツールにIAMコンソールで生成したユー ザー名、パスワードを登録

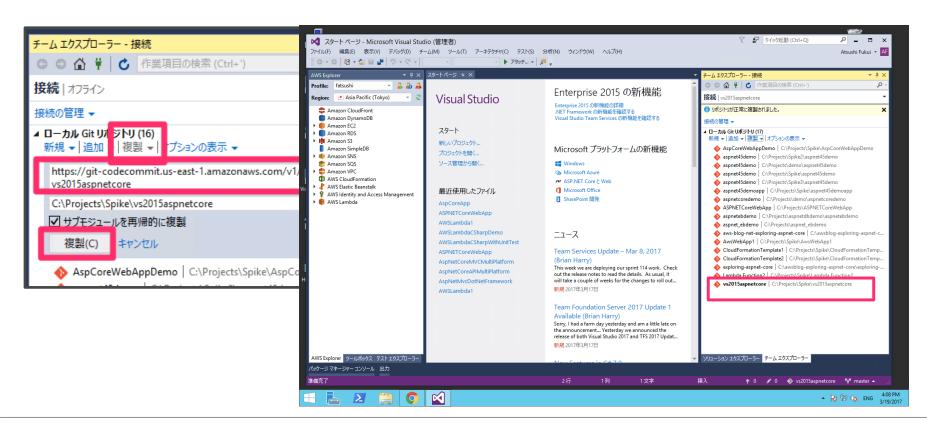


### Visual Studio からの接続



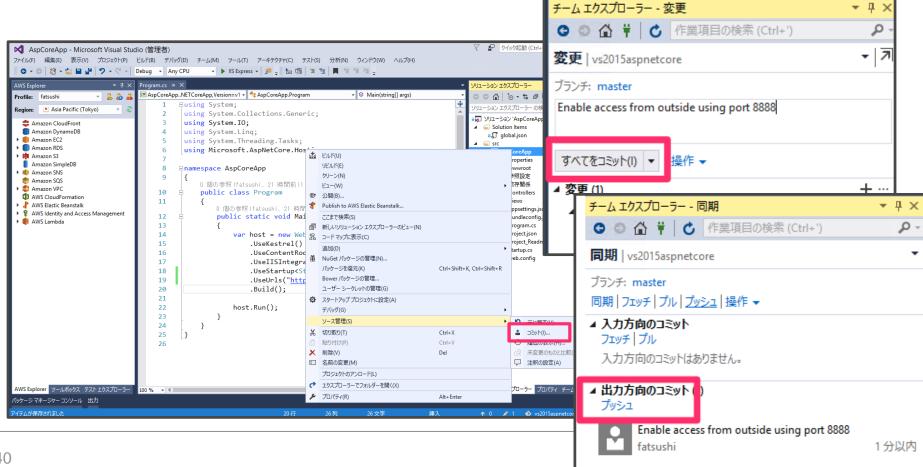


#### Visual Studio からの接続





### Visual Studio からの接続



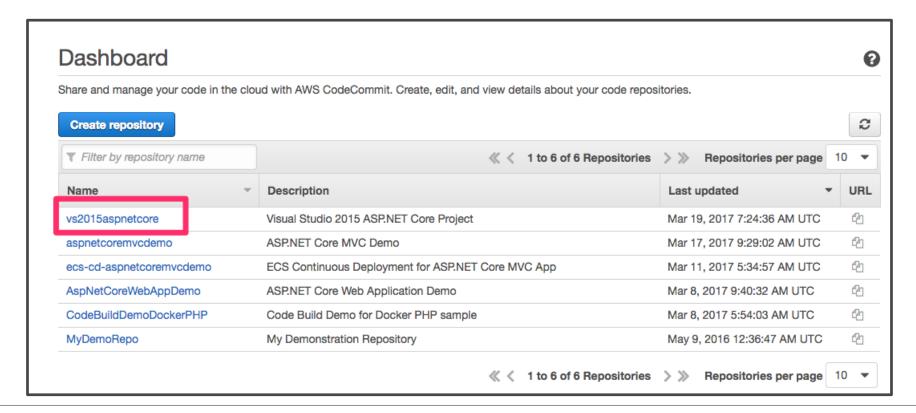
# 参考資料: git を学ぶ

- ◆ Pro Git https://git-scm.com/book/ja/v2 (日本語)
- ❖ Git Cheat sheet <a href="https://services.github.com/on-demand/downloads/ja/github-git-cheat-sheet.pdf">https://services.github.com/on-demand/downloads/ja/github-git-cheat-sheet.pdf</a> (日本語)
- Git Immersion http://gitimmersion.com/
- Git Reference http://gitref.org/index.html
- ❖ git はHTTPプロトコルを利用する場合、デフォルトでは毎回ユーザー名、パスワードの入力を求めるが、git config --global credential.helper を利用することでクレデンシャル情報をキャッシュまたは保存することが可能以下を参照

https://git-scm.com/book/en/v2/Git-Tools-Credential-Storage

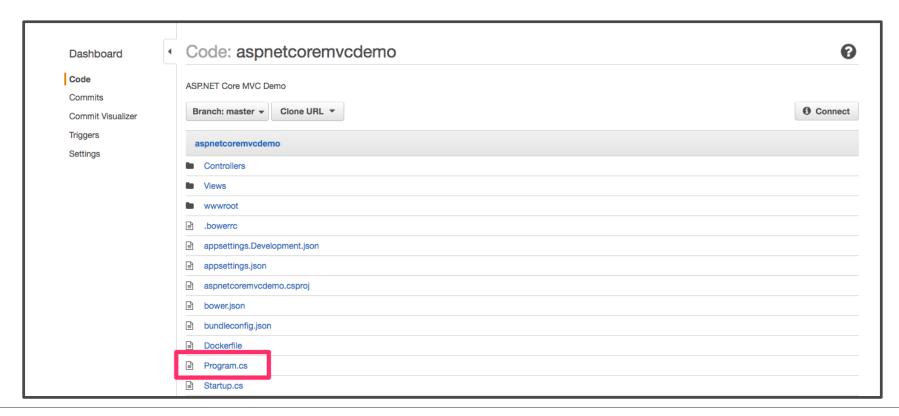


# リポジトリのコンテンツ参照

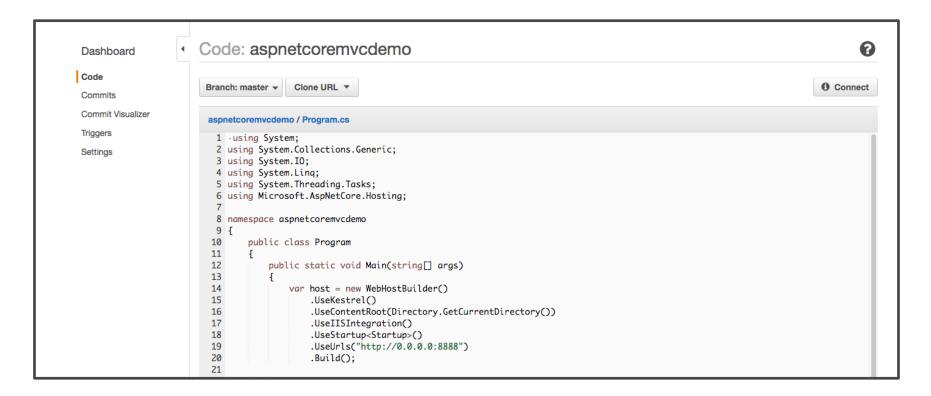




# リポジトリのコンテンツ参照



# リポジトリのコンテンツ参照



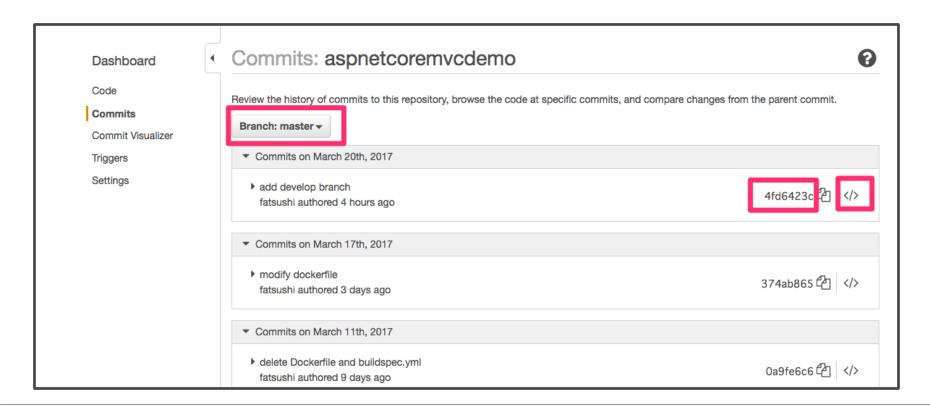


# コミット履歴の表示

- ◆ AWS CodeCommit コンソールでリポジトリのコミット履歴を表示
  - ❖ git rebase コマンドでリベースを行った場合は、リポジトリの履歴が変更されるので注意
  - ❖ ブランチやタグを切り替えて表示可能
  - ❖ 直前のコミットとの差分比較(スプリット表示または統合表示が可能)
  - ❖ コミット履歴のユーザー名にマウスカーソルを合わせるとEメールアドレス を表示
  - ❖ Commit IDをコピー可能。コマンドラインのコミットの比較で利用可能
  - ❖ </>マークをクリックすると対象のソースコードを表示



## コミット履歴の表示





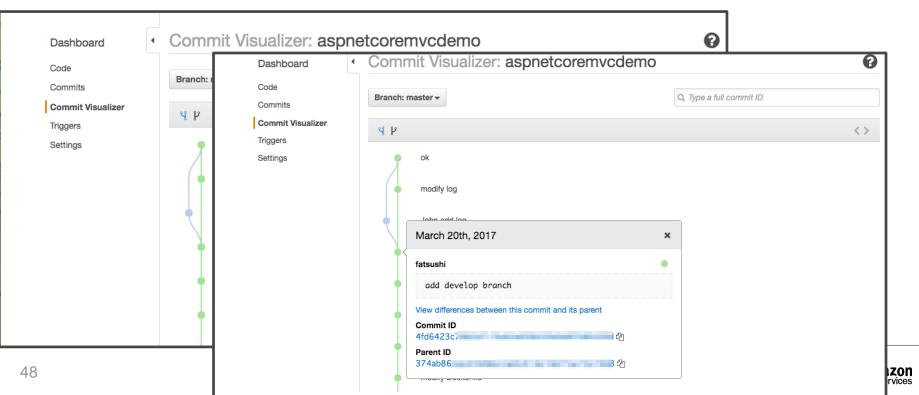
# コミット履歴の表示

```
Program.cs
                                                                                                      </>
                                                              using System;
         using System;
         using System.Collections.Generic;
                                                               using System.Collections.Generic;
                                                              using System;
         using System.IO;
                                                              using System.IO;
         using System.Linq;
                                                              using System.Linq;
         using System.Threading.Tasks;
                                                              using System.Threading.Tasks;
         @ -11,6 +12,8 @@
                                                              @ -11,6 +12,8 @@
 ...
   11
                                                        12
                 public static void Main(string[]
                                                                       public static void Main(string[]
                                                        13
       args)
                                                            args)
   13
                                                        14
                                                        15 +
                                                                          //add log for develop branch
                                                        16 +
                                                                          Console.WriteLine("log
                                                            comment");
                     var host = new
                                                        17
                                                                           var host = new
   14
       WebHostBuilder()
                                                             WebHostBuilder()
                          .UseKestrel()
                                                        18
                                                                               .UseKestrel()
   16
                                                        19
        .UseContentRoot(Directory.GetCurrentDirector
                                                             .UseContentRoot(Directory.GetCurrentDirector
       y())
                                                            y())
 ...
```



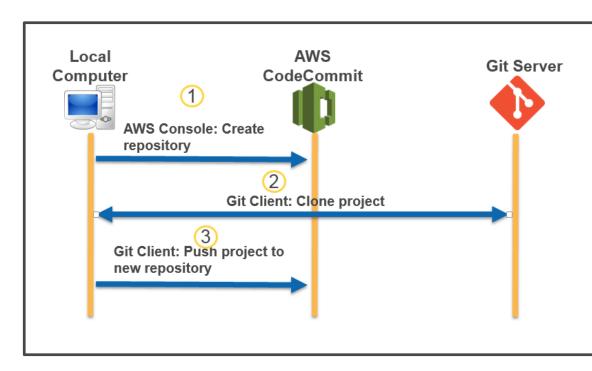
# コミット グラフの表示

# ◆ Commit Visualizer を選択



# 他のGitリポジトリからのマイグレーション

- ❖ 他のGit リポジトリから のマイグレーションは 非常にシンプル
- CodeCommitにリポジトリを作成
- 2. 他のGitリポジトリから ローカルにクローン
- 3. CodeCommit(\(\mathcal{Z}\)Push





# AWSサービスとの連携

- \* AWS CloudTrail
- \* AWS CodeBuild
- \* AWS Elastic Beanstalk
- AWS CloudFormation
- AWS CodePipeline
- \* AWS Key Management Service
- AWS Lambda
- Amazon Simple Notification Service













# AWS CloudTrailを利用したAPIコール ログ取得

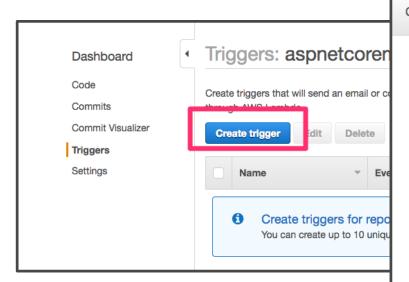
❖ AWS CodeCommit は、AWS CloudTrailと連携してコンソール、git クライアント、AWS CLI から発行される CodeCommit API をキャプチャーしてS3 バケットに保存可能

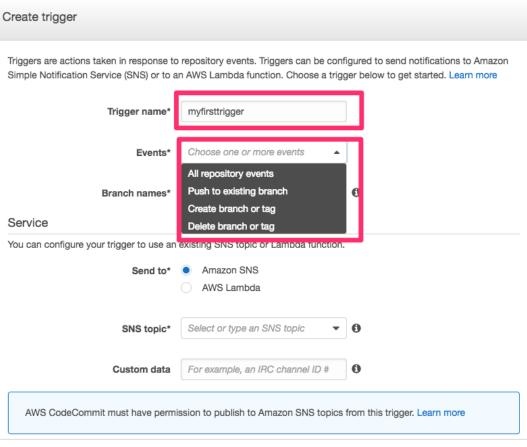
### AWS CodeCommit リポジトリ トリガー

- ❖ AWS CodeCommit リポジトリのトリガーを構成 (コードのPush時など)
  - ❖ Amazon SNSをによるトピックの通知
  - ❖ AWS Lambda の実行
  - ❖ 関連リソースは CodeCommit と同じリージョンで作成する必要がある
- ❖ 作成したトリガーはテストすることができる
  - ❖ コンソールとAWS CLIの両方で可能



## トリガーの作成





\*Required

# AWS CodeCommit 制限事項

リポジトリの数	アカウントごとに1,000まで
単一のPushの参照数	最大4,000 (create, delete, update を含む)。リポジトリ内の全体の参照数は無制限。
リポジトリ内のトリガーの数	10以内
リポジトリ名	1~100文字まで。.gitで終わる名前をつけることは出来ない。以下の文字は含むことができない。 !?@#\$%^&*()+={}[] \/><~`'";:
Git blob サイズ	ファイルの数や単一のコミットでのファイルの合計サイズは無制限。メタデータは6MB以下、単一のblogファイルのサイズは2GBまで。
Commit Visualizer のブランチ数	35 ブランチ/ページ。



### CodeCommit の価格

最初の5 アクティブ ユーザー	最初の5以上のアクティブ ユーザー(ー 人当たり)
無料	1ドル/月
<ul><li>無制限のリポジトリ数</li><li>月に50GBのストレージ</li><li>10,000 Git リクエスト/月</li></ul>	<ul><li>無制限のリポジトリ数</li><li>月に10GBのストレージ/ユーザー</li><li>2,000 Git リクエスト/月/ユーザー</li></ul>

#### 上記の制限を超えた場合

- \$0.06 / GB / 月
- \$0.001 / Git リクエスト



# AWS CodeCommit 関連Blog ポスト

- Using AWS CodeCommit with Git Repositories in Multiple AWS Accounts Using AWS CodeCommit and GitHub Credential Helpers
- Using AWS CodeCommit from Eclipse
- AWS CodeCommit with Amazon EC2 Role Credentials
- AWS CodeCommit and SourceTree Setup Tutorial with SSH Keys
- Integrating AWS CodeCommit with Jenkins
- Integrating AWS CodeCommit with Review Board





#### **AWS CodeBuild**



# ❖フルマネージド

❖ AWS CodeBuild はセットアップ、パッチ、アップデート、サーバー管理の手間が不要

### ❖オン デマンド

❖ビルドしたいニーズに合わせて自動でスケール。利用した分数のみのお支払い

## ❖すぐに使える

❖最もポピュラーな開発言語用の構成済みのビルド環境を提供。最初にビルドスクリプトを作成するだけ。



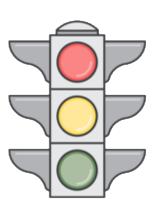
# どのように動作するのか?

- 1. ソースコードのダウンロード
- 2. 一時的なコンテナ内でbuildspecで構成されたコマンドを実行(ビルドごとに新規に作成される)
- 3. マネジメント コンソールとCloudWatch Logs にビルドの出力結果が送信される
- 4. 生成されたアーティファクトをS3バケットにアップロード



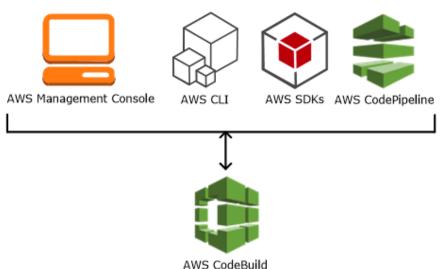
#### CodeBuildでどのようにリリースプロセスを自動化するか?

- CI/CDのためのAWS CodePipelineとの統合
- 容易な自動化(API/CLI)
- ビルド環境を持ち込み可能
  - 必要なツールを含むDockerイメージの作成
- オープンソース Jenkins プラグイン
  - CodeBuildをJenkins Master のWorkerとして利用



### AWS CodeBuild の実行

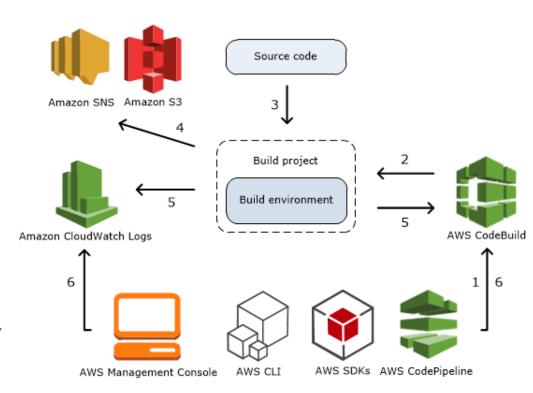
- ❖AWS CodeBuild のコンソール
- ❖AWS CodePipeline のコンソール
- **\***AWS CLI
- \*AWS SDK





### AWS CodeBuild のコンセプト

- 1. CodeBuild にビルド プロジェクトを 作成
- 2. AWS CodeBuild はビルド プロジェクトに基づいてビルド環境を構築
- 3. AWS CodeBuildはソースコードをダウンロード
- 4. ビルドのアウトプットをS3へアップ ロード
- 5. ビルド実行中、AWS CodeBuild と AWS CloudWatch Logs に情報を送 信
- 6. ビルド実行中、AWS CodeBuild コンソール、AWS CLI、AWS SDK、AWS APIでビルド情報を取得



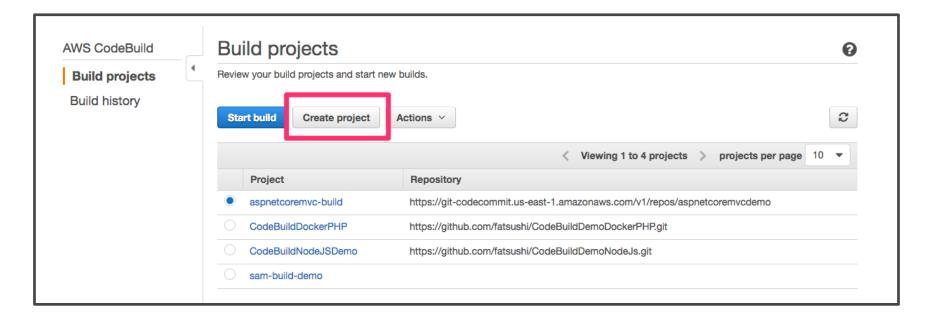


### AWS CodeBuild を実行するまえに

- ❖ ソースコードはどこから取得?
  - AWS CodeCommit、Amazon S3、GitHub
- ❖ 実行すべきビルド コマンドと実行順序は?
  - buildspec にダウンロードしたソースをどのようにアプトプットするかを記載
- ❖ どのようなランタイムとツールがビルドに必要か?
  - = 言語はJava, Ruby, Python, Node.js? ビルドツールは Maven, Ant, コンパイラ実行? ビルドはGit, AWS CLIが必要? それとも他のツール?
  - AWS CodeBuildは Docker Imageを利用したビルド環境でビルドを実行する
     http://docs.aws.amazon.com/codebuild/latest/userguide/build-env-ref.html#build-env-ref-available

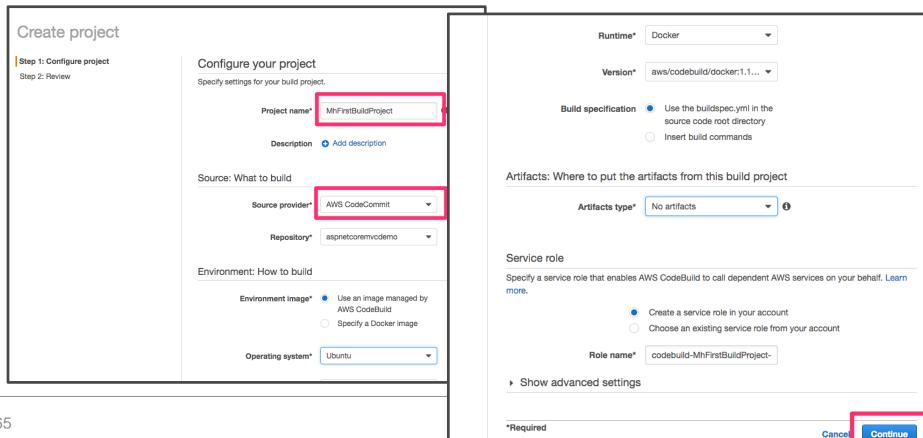


## AWS CodeBuild プロジェクトの作成



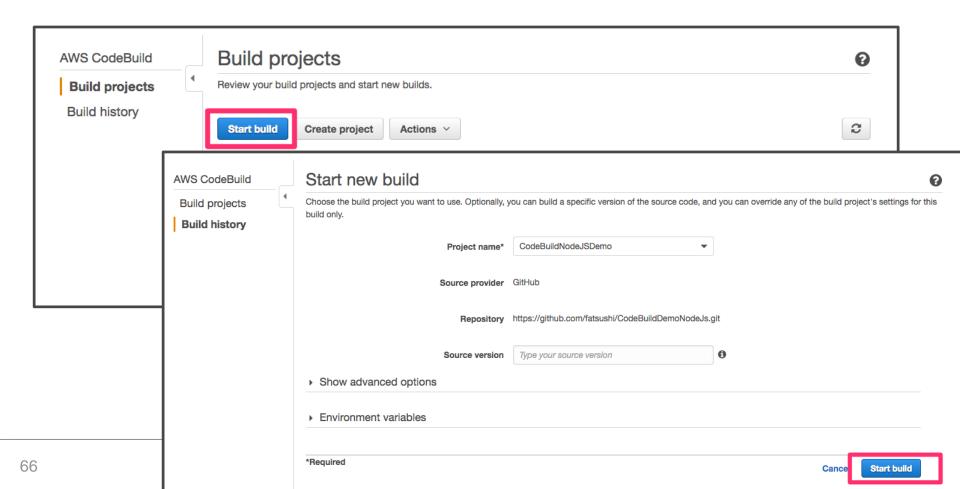


# AWS CodeBuild プロジェクトの作成

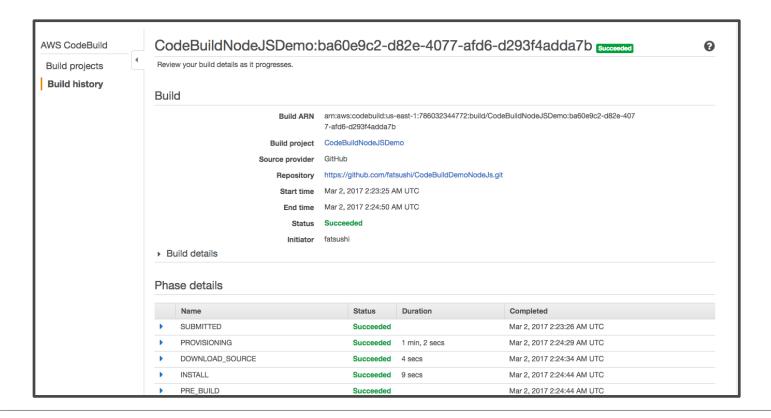


Cancel

#### AWS CodeBuild の実行

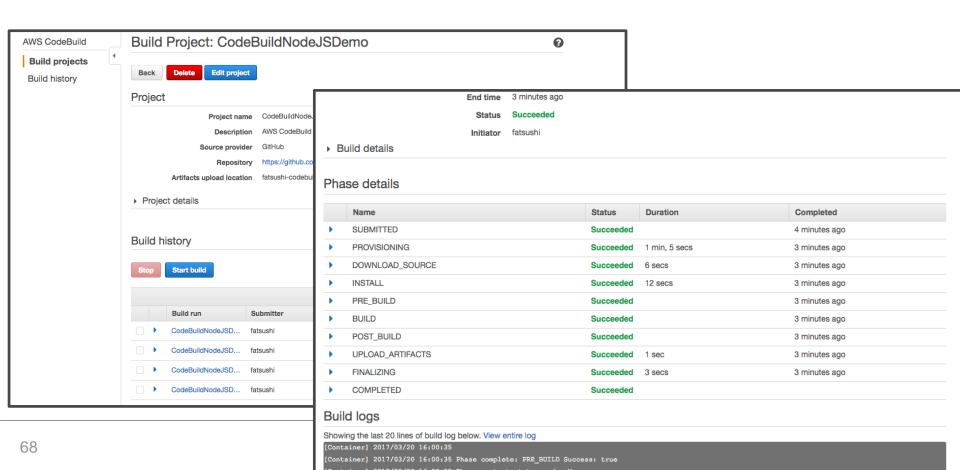


#### AWS CodeBuild の実行





#### AWS CodeBuild の履歴



# buildspec.yml Example

```
version: 0.1
environment variables:
 plaintext:
    JAVA HOME: "/usr/lib/jvm/java-8-openjdk-amd64"
      - apt-get update -y
      - apt-get install -y maven
  pre build:
      - echo Nothing to do in the pre_build phase...
 build:
      - echo Build started on `date`
      - mvn install
  post build:
      - echo Build completed on `date`
artifacts:
  files:
    - target/messageUtil-1.0.jar
```

- ビルドの各フェーズで利用される環境変数
- 各フェースで実行するコマンドの指定
  - "insutall"では環境を準備するため のパッケージのインストールやコマ ンドの実行など
  - "pre build"では構文チェックやコマンドの実行など
  - "build"ではビルドツールやコマンド の実行など
  - "post build"ではテスト実行やレポジトリへのコンテナイメージの配布
- アーティファクトを作成しS3に保存



# buildspec.yml (1/2)

			説明
version			必須。0.1 の指定を推奨。
environment _variables	plaintext		オプション。カスタムの環境変数をキー/値で指定。同名の環境変数が既に存在する場合は上書きするので注意。CODEBUILD_で始まる環境変数は内部利用のため予約されている。
phases	install	command s	オプション。インストールフェースで実行するコマンドを指定。例えば 単体テストで利用するMochaやRSpecのインストールなど。
	pre_build	command s	オプション。ビルド前に実行するコマンドを指定。例えばAmazon ECRへのログインやnpmの依存関係のインストールなど。
	build	command s	オプション。ビルドで実行するコマンドを指定。例えばMochaや Rspecの実行など。記述された順番にひとつずつコマンドを実行。
	post_build	command s	オプション。ビルド後に実行するコマンドを指定。例えばビルドした成果物をWARやJARにパッケージ化するためにMavenを実行したり DockerイメージをECRにPushしたり、その後SNSにビルド状態を通知するなど。



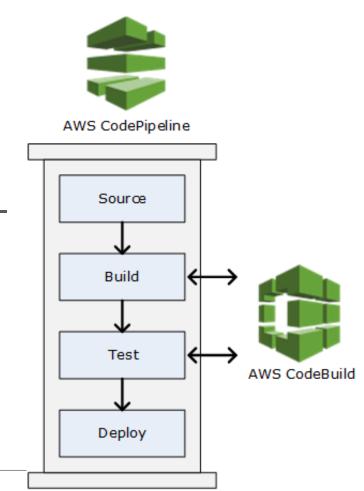
# buildspec.yml (2/2)

		説明
artifacts	files	オプション。CodeBuildがビルド出力の場所を知り、Amazon S3へ成果物をアップロードする準備を行うために利用。設定例: my-file.jar (単一ファイル) my-subdirectory/*(ディクトリ以下のファイル) my-subdirectory/**/*(ディレクトリ以下のすべてのディレクトリとファイル) **/*(すべてのファイル)
	discard- paths	オプション。ビルド出力成果物内のパスを保持するかどうかを指定。 No(デフォルト)はpath情報を保持。
	base- directory	オプション。一つ以上のトップレベル ディレクトリを指定。指定されたディレクトリからの相対パスでマッチするファイル/ディレクトリを出力。



# AWS CodePipeline との連携

- ❖ CodePipeline の Build または Test アクションに追加可能
- ◆継続的インテグレーションの一部としてAWS CodeBuildを利用



### 注意点

- 前のフェーズで実行に失敗した場合は、次のフェーズのコマンドは実行されない
- コマンドは個別の環境で実行されるため、直前のコマンドで設定した環境変数やディレクトリの変更は引き継がれない
  - シェル スクリプトを記述することでまとまったコマンドとして実行可能

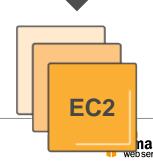


# **Building Your Code**

- ❖ コードの「ビルド」は、一般に、コンパイル 済みのバイナリを要求する言語を指す:
- ❖.NET言語: C#、F#、Visual Basicなど
- ❖ Java言語とJVM言語: Java、Scala、JRuby
- ❖ Go
- ❖ iOS言語: Swift、Objective-C
- ❖ Dockerコンテナイメージを作成するプロセスも画像の「ビルド」と呼ぶ







### ビルド不要

- ❖ 最近の多くの言語はビルドが不要:
- ❖ 以下の言語はインタープリタ型言語と呼ばれる:
- PHP
- Ruby
- Python
- Node.js
- ❖ コードをデプロイするだけ!









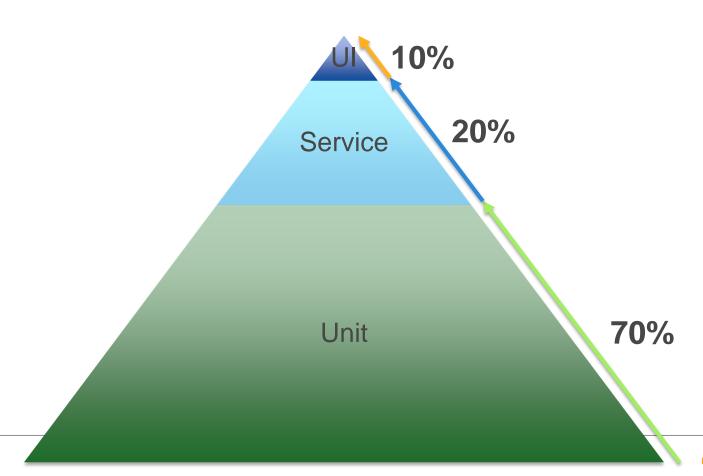
### コードのテスト

- ❖ テストは科学であると同時に芸術でもある!
- コードをテストする目的:
  - 期待どおりに機能することを確認
  - プログラミングの構文エラーを捕捉
  - コーディング パターンの標準化
  - アプリケーションの不適切な使用法やロジックの欠陥によるバグを削減
  - アプリケーションをよりセキュアにするため



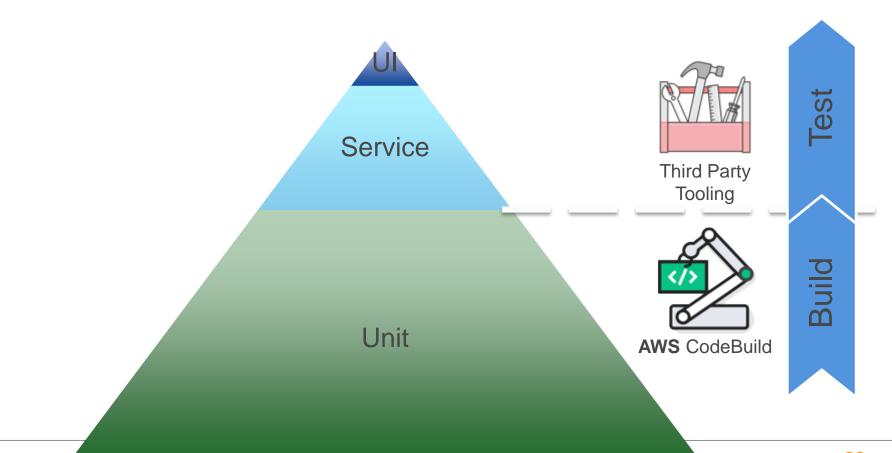


### テストに焦点を当てる場所:





### サービスとリリース ステップがどのテストと関連するか?





### 価格

- 分単位の課金
- メモリとCPUリソースの量によって3つの異なるタイプ を選択

Compute instance type	Memory (GB)	vCPU	Price per build minute (\$)
build.general1.small	3	2	0.005
build.general1.medium	7	4	0.010
build.general1.large	15	8	0.020

• build.general1.smallで100分/月の無料枠



## **AWS CodeDeploy**



#### ❖ 自動化されたデプロイメント

- ❖ 開発、テスト、本番環境への完全に自動化されたデプロイメント。AWS CodeDeployは数千台の環境にスケール可能
- ❖ 最小のダウンタイム
  - ❖ インプレース デプロイメントではAmazon EC2インスタ ンスに対してローリング アップデートが可能
  - ❖ ブルー/グリーン デプロイメントでは最新のリビジョンを インスタンスにデプロイしてトラフィックを即時またはテ スト完了後すぐに新しい環境にリルート
- ❖ 停止とロールバック
  - ❖ 自動的またはマニュアルで停止とロールバックが可能
- ❖ センターコントール
  - ❖ AWS CodeDeployコンソール及びAWS CLIでステータスのトラックが可能
- ❖ 容易な適用





### **AWS CodePipeline**



- ❖ リリース プロセスを自動化
  - ❖ ソースリポジトリからビルド、テスト、デプロイメ ントまで完全に自動化されたリリース プロセス
- ❖ 一環したリリース プロセスを確立
- ❖ 改善された品質でデリバリをスピードアップ
  - ❖ リリース プロセスを自動化し、インクリメンタル な機能追加を可能とすることで素早くリリース
- ❖ お気に入りのツールを利用可能
  - ❖ 既存のソース、ビルド、デプロイメントのツールを パイプラインに組み込み
- ❖ 進捗状況が一目瞭然



### まとめ

❖ AWS CodeCommit はプライベートで無制限のリポジトリを容易に構築可能

❖ AWS CodeBuild はフルマネージドなビルド環境を 提供

❖ これらを活用することで高品質なソフトウェアをインクリメンタルな開発手法で素早くリリース!



### aws.amazon.com/devops



AWS provides a set of flexible services designed to enable companies to more rapidly and reliably build and deliver products using AWS and DevOps practices. These services simplify provisioning and managing infrastructure, deploying application code, automating software release processes, and monitoring your application and infrastructure performance.

DevOps is the combination of cultural philosophies, practices, and tools that increases an organization's ability to deliver applications and services at high velocity: evolving and improving products at a faster pace than organizations using traditional software development and infrastructure management

### AWS DevOps Blog





AWS re:Invent

**Products** 

More ▼

My Account ▼

Sign In to the Console

AWS DevOps Blog

### Building a Cross-Region/Cross-Account Code Deployment Solution on AWS

by BK Chaurasiya | on 01 NOV 2016 | in How-To | Permalink | Comments

Many of our customers have expressed a desire to build an end-to-end release automation workflow solution that can deploy changes across multiple regions or different AWS accounts.

In this post, I will show you how you can easily build an automated cross-region code deployment solution using AWS CodePipeline (a continuous delivery service), AWS CodeDeploy (an automated application deployment service), and AWS Lambda (a serverless compute service). In the Taking This Further section, I will also show you how to extend what you've learned so that you can create a cross-account deployment solution.

We will use AWS CodeDeploy and AWS CodePipeline to create a multi-pipeline solution running in two regions (Region A and Region B). Any update to the source code in Region A will trigger validation and deployment of source code changes in the pipeline in Region A. A successful processing of source code in all of its AWS CodePipeline stages will invoke a Lambda function as a custom action, which will copy the source code into an S3 bucket in Region B. After the source code is copied into this bucket, it will trigger a similar chain of processes into the different AWS CodePipeline stages in Region B. See the following diagram.



Ph	- 1-	43	Ph		- 100	
500 D	V~37	TPA	1101	ni simi		
Sear	U11	uic	201		0 🗀	ичы

_					
					R

Search

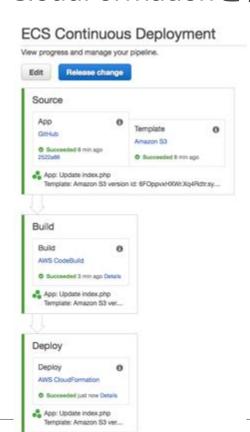
AWS Developer Tools

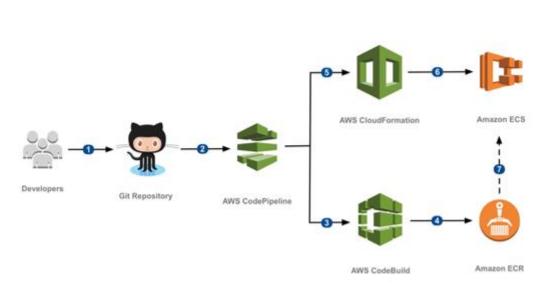
AWS Management Tools

DevOps and AWS

Resources for DevOps on

# AWS CodePipeline, AWS CodeBuild, Amazon ECR, AWS CloudFormationを利用したAmazon ECSへの継続的デプロイメント





Developers continually integrate their changes together into a main branch hosted within a source code repository system such as Github. AWS CodePipeline pols the source code repository and friggers an execution of the continuously delivery pipeline when a new revision is found. AWS CodePipeline sends the new revision to AWS CodeBuild which builds a Docker container image from the source code. AWS CodeBuild pushes the newly built Docker container image tagged with the build ID to an Amazon ECR AWS CodePipeline initiates an update of the AWS CloudFormation stack which defines the Amazon EGS task definition and service. NWS CloudFormation creates a new task definition revision referencing the newly built image and updates the Amazon ECS service Amazon ECS fetches the new container from Amazon ECR and eplaces the old task with this new one which completes the deployment amazon web services



